

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

がん関連苦痛症状の体系的治療の開発と実践
および専門的がん疼痛治療の地域連携体制モデル構築に関する研究

在宅医療における終末期過活動せん妄の体系的治療に関する研究

研究分担者：浜野淳 筑波大学 医学医療系 緩和医療学
研究協力者：阿部晃子 国立がん研究センター中央病院 緩和医療科
川越正平 あおぞら診療所
住谷智恵子 あおぞら診療所
竹田雄馬 わかたけクリニック

研究要旨：在宅医療における終末期過活動せん妄に対する体系的治療開発に向け、2022年度に実施した事前調査の結果を元にアルゴリズム原案を作成し、2023年度にパネルディスカッションを経て確定した。2024年度はアルゴリズムの実施可能性調査のための前向き観察研究を実施した。アルゴリズムに沿って治療を行うと、解析可能な症例のうち約8割で、介入終了時には治療目標達成度が80～100%となっていた。患者の状態や療養環境を考慮すると、在宅で終末期過活動せん妄に対応するためには、短期間で患者と家族が望むゴールを達成できる視点が必要である可能性が考えられる。

A. 研究目的

これまでに終末期過活動せん妄に対しては入院下での体系的治療（アルゴリズム）開発が行われてきたが、在宅医療における薬剤選択や対応については個々の訪問診療医に任されているのが現状である。そこで、在宅医療における終末期過活動せん妄に対するアルゴリズム開発を行うこととした。

B. 研究方法

2022年度の事前調査の結果を元にアルゴリズム原案を作成し、2023年度に6つの専門団体の代表者とのパネルディスカッションを経てアルゴリズムと治療レジメンを確定した。2024年度はアルゴリズムの実施可能性を調査するため、症例登録期間を2024年10月1日～2025年3月31日とした前向き観察研究を実施した。

（倫理面への配慮）

前向き観察研究は、国立がん研究センターの研究倫理委員会にて審査、承認を受けて実施した。本研究は侵襲及び介入を伴わない研究であり、利用する情報はいずれも過去の診療情報である。研究目的に適した対象を得るためには、状態の悪い患者、意識障害のある患者、苦痛の強い患者も対象にする必要があり、「人を対象とする生命科学研究・医学系研究に関する倫理指針」の同意取得が困難な場合に該当すると考える。倫理指針に基づき、診療情報を提供する機関及び提供を受ける機関の双方において、掲示あるいは容易に到達できるホームページ等に本研究の実施を公開し、研究対象者に拒否の機会を与える形で対応した。

C. 研究結果

期間中に42件の症例登録があった。登録は

2025年3月31日で終了したが、現時点（2025年4月24日）では観察が継続されている症例があるため、結果の詳細な報告には至らないが、性別は男性20名、女性22名と男女比は概ね1:1であった。年齢は平均72.0歳で、44歳から94歳まですべての年代にほぼ均等に分布していた。介入後1週間以内に亡くなるケースが多い傾向や、身体状態の悪化により定期的な薬物療法を必要とせず頓用対応で経過観察となるケースも一定数あることが観察された。アルゴリズムに沿って治療を行うと、解析可能な症例のうち約8割で、介入終了時には治療目標達成度が80～100%となっていた。

D. 考察

在宅医療における終末期過活動せん妄に対しては、主介護者である家族が非医療者であることや患者の生命予後が短いことを考慮し、短期間で患者と家族が望むゴールを達成できるような工夫が必要である可能性がある。

【今後の提言】

- 在宅医療専門医の治療法を可視化した治療アルゴリズムの普及と実装
 - 治療アルゴリズムを用いて診療を行うことで、在宅医療におけるせん妄診療に関して、医療者のせん妄診療経験を問わず一定水準の適切な診断・評価・対応を確保できると考えられる。
 - 在宅におけるせん妄診療の質を向上するため、在宅医療に携わる医療者を対象に、治療アルゴリズムのコンセプトと具体的な使い方を伝え、普及実装を図ることが重要である。そのための方策には、基本的緩和ケア教育における冊子や動画による説明、既存の診療ガイドラインへのコンテンツの追加などが考えられる。
- 在宅医療におけるせん妄診療に関する学習機会

の拡充やネットワークの構築

・在宅診療に携わる医療者の、せん妄に関する知識や治療・ケアの理解と実践を推進するために、IT 等を活用した情報提供、職種に合わせた定期的な学習機会の提供のための事業を行う。

・在宅診療を受ける患者・家族の、せん妄に関する知識や対応方法を普及・啓発するために、様々な媒体を活用した情報提供や、普及・啓発活動のための事業を行う。

・在宅医療に携わる医療者がせん妄の対応に悩んだ際の相談・連携のネットワークを構築するため事業を行う。具体的には、せん妄診療経験の豊富な訪問診療医や精神科専門医と必要時に情報共有し相談できるシステムや制度設計が必要だと考えられる。

E. 結論

観察研究の結果集積と解析を進め、在宅医療における終末期過活動せん妄に対するアルゴリズムの課題を明らかにし、改善及び普及啓発に繋げる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

阿部晃子, 浜野淳, 里見絵理子, 他. 在宅がん患者の終末期過活動せん妄に対する薬物治療の実態調査. 日本在宅医療連合学会誌 2024; 5(4): 16-24 (事前調査の結果に関する和文論文)

2. 学会発表

観察研究の結果に関しては 2026 年度の日本緩和医療学会で発表予定。

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし